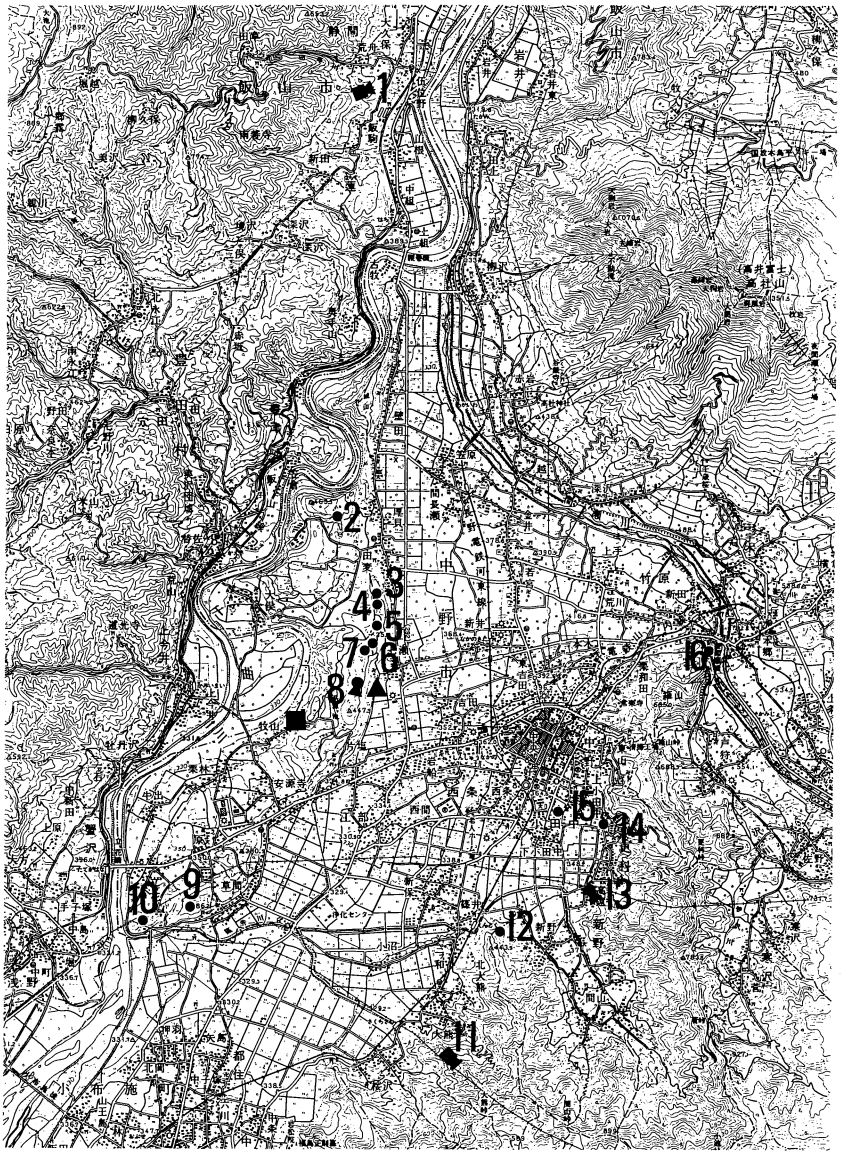
第8節　善光寺平北部の古墳と地域集団

――七瀬・栗林遺跡の古墳時代集落――

1　中野市周辺の古墳

この地域における古墳で現在その内容が知られるのは、七瀬双子塚古墳(前方後円墳)をはじめとする5世紀以降の古墳だけである。その数は5世紀代のみを取り上げれば、周辺他地域よりも多い。しかし、後期古墳は夜間瀬古墳群など数基が知られるのみである。5世紀から6世紀前半頃までの古墳は、割竹形木棺の多さ、合掌形石室の存在や初期須恵器の出土など、特徴的な様相をもつものがある。この地域の古墳時代は、これらの中期古墳とともに、それに系譜的に直接先行するものとは考えられない蟹沢古墳・勘介山古墳(前方後方墳)の存在によって特徴付けられる。

七瀬遺跡と栗林遺跡のうち、弥生時代末から古墳時代初頭の集落は、前方後方墳の造営に、栗林遺跡のうちで古式の須恵器を有する集落は中期古墳の造営に、それぞれ脈絡をもって考えなければならない存在である。古墳時代前期・中期の古墳分布は、中野扇状地の周囲において、時期的・地理的にかなり偏在している。七瀬遺跡・栗林遺跡の所在する丘陵地は、地域最大の古墳である七瀬双子塚古墳[土屋1982a]に代表され、林畔1・2号墳[小野・横山1953]など、県内他地域にあまり見られない割竹形木棺が集中し、中期古墳の濃密な分布域である[土屋1993]。これらは5世紀中葉以降の比較的短期間に集中して築かれ、この丘陵地では前期あるいは後期の古墳を確認できない。一方、扇状地東側には、蟹沢古墳[田川・松沢1982]のように前期段階の古墳が存在する。また、中期古墳としては紫岩古墳[檀原1982]・金鎧山古墳[土屋1982b]などの、初期須恵器を持ち埋葬施設の上でも横穴式石室導入期直前と考えられる特徴的な様相をもつ古墳が分布している。



▲	七瀬遺跡	8	七瀬双子塚古墳
■	栗林遺跡	9	京塚古墳
		10	立ケ花2号墳
1	勘介山古墳	11	蟹沢古墳
2	山の神古墳	12	金鎧山古墳
3	林畔2号墳	13	高遠山古墳
4	林畔1号墳	14	姥懐古墳
5	七瀬5号墳	15	光念寺古墳
6	七瀬3号墳	16	紫岩古墳
7	七瀬2号墳		

第456図　周辺の主要古墳

第25表　周辺の主要古墳

番号	古墳名	所在地	墳形	埋葬施設	棺	規模・その他
1	勘介山	飯山市静間	前方後方			全長35ｍ
2	山の神	中野市厚貝	円	木棺直葬	割竹形木棺	径32ｍ・1948年発掘
3	林畔２号	〃　田麦	円	木棺直葬	割竹形木棺	径27ｍ・〃
4	林畔１号	〃　田麦	円	木棺直葬	割竹形木棺	径23ｍ
5	七瀬５号	〃　七瀬	円	木棺直葬	割竹形木棺	径20ｍ・主体部3・1987年発掘
6	七瀬３号	〃　七瀬	円	木棺直葬	割竹形木棺	径19ｍ・主体部3・1988年発掘
7	七瀬２号	〃　七瀬	円	木棺直葬？		径17ｍ・1986年発掘
8	七瀬双子塚	〃　七瀬	前方後円	木棺直葬？		全長61ｍ
9	京塚	〃　草間	円	木棺直葬	割竹形木棺	径30ｍ・主体部3・1991年発掘
10	立ケ花２号	〃立ケ花	円			径32ｍ
11	蟹沢	〃　桜沢	前方後方			全長36ｍ
12	金鎧山	〃　新野	円	合掌形石棺		径21ｍ・1925年発掘
13	高遠山	〃　〃	前方後円			全長55ｍ・前方後方の可能性
14	姥懐	〃　更級	円？	木棺直葬？		径17ｍ
15	光念寺	〃小田中	円			
16	紫岩	〃栗和田	円	横穴式？		径19ｍ・竪穴式石室の可能性

2　前期古墳の築造

この地域の古墳は、東日本一円の状況から見て、前方後方墳である勘介山古墳[松沢1982]・蟹沢古墳に始まるものと考えられる。別項でも述べているように、この地域では、Ｓ字甕Ａ類段階の集落が扇状地末端の低湿地帯周辺にかなり広く分布することがあきらかになりつつある[綿田1991]。Ｓ字甕Ａ類の分布と前方後方墳の存在こそが、この地域を特色付ける。４・５世紀の集落の状況はまだ充分あきらかではないものの、外来系土器を特徴とする集落は、七瀬遺跡に見られるように今のところ４世紀前半代より後には継続しない。また、栗林遺跡においては、前期と中期では立地をやや変えていることがあきらかにされた。この地域の外来系土器、なかでも東海系土器の多出は、前方後方墳築造の契機を間接的に示す現象であろう。蟹沢古墳の位置からすれば、前方後方墳築造を直接に担ったのは、七瀬遺跡や安源寺遺跡の集団ではなく低湿地帯東縁の集団と思われる。また、七瀬・安源寺遺跡[金井・他1967]の集団もその築造基盤の一部を構成したであろうことが、勘介山古墳との位置関係や集落における東海系土器のありかたなどからも読み取れる。前方後方墳の築造に示される歴史的条件が長期間継続するようなものでなかったことは、以後１世紀の間古墳築造が途絶えることばかりでなく、集落の動向からもうかがえる。

このような様相は、まさに赤塚のいう東海系土器(廻間様式)の第一次拡散期[赤塚1990]に対応する現象と見ることができるのではないか。いわゆる波及ルートの問題も、七瀬遺跡における北陸系・東海系土器群の消長から見るならば、南方からの波及であった可能性は大きいと考える。拠点的・一時的であるという

第一次拡散そのものの性格からしても、東海系土器の波及が七瀬遺跡よりもやや早かった塩尻市上木戸遺跡［宇賀神・他1987］の存在は、七瀬遺跡のもつ意義をよく示している。一方、この地の北陸系土器の濃密な分布から、前方後方墳の築造を北陸・越地域との交流に直接的契機を求めて理解しようという意見がある［甘粕1986］。しかし、七瀬遺跡における外来系土器の消長や地域全体の古墳の様相からすれば、S字甕A類の波及に先立つ北陸との関係は、その前提ではあっても直接の契機ではない。それは、東海系土器の波及にこそ求められるべきである。北陸東部系土器の影響が漸増する［前島1993］という前提があったが故に、この地に東海系土器がもたらされたのであり、前方後方墳が築かれたと考える。土器様相においては、この段階以降、畿内的様相を深める4世紀末ころまで、これほどの画期は今のところ認められない。土器の画期と相応する墓制の変化は、前方後方墳の出現以外には求められないのである。　県内の前方後方墳のうち、弘法山古墳［斉藤・他1978］の周辺においても、以後の古墳築造の状況や外来系土器の様相・集落の動向［臼居1993、直井1993］など同様に見てよいと思われる点がある。いま、この土器様相における画期と前方後方墳築造との時間的接点を確かめる材料は乏しい。しかし、この地の前方後方墳がS字甕A類の存在に示されるように、弘法山古墳にそれほど遅れるものでなかったとすれば、蟹沢古墳や勘介山古墳は越中・越後の古墳出現に先んじた可能性があることになろう。この推測が成り立つものであれば、いわゆる「北陸型」前方後方墳［赤塚1992］の出現の契機［甘粕・他1993］についても、やや考えを改めるべき点があるかもしれない。

一方、善光寺平南部においては、この第一次拡散期を示す現象は明確でなく、S字甕B類段階以降になると集落遺跡からの東海系土器の出土が、量的多寡は別としてかなり普遍的になる［青木1993］。これは同時期の畿内系土器のあり方からも、森将軍塚古墳［岩崎・他1992］の築造に示される事態に結果する現象であろう。この地域では森将軍塚古墳以降、4世紀半ばから6世紀初頭まで前方後円墳の築造が継続する〔岩崎1989〕。この状況は弘法山古墳周辺やこの地域の状況とはかなりの差があり、いわゆる前方後円墳体制［都出1992］のうえで善光寺平南部の地域集団が占めた優位性を示す。同時に、前方後方墳の築造においては事情が異なることを暗示する。このことは、南部の前方後円墳集中地域における唯一の前方後方墳として知られる姫塚古墳［岩崎1982］が、蟹沢古墳や弘法山古墳とは、年代観も含めて、異なる歴史的条件のもとで築かれたことを推測させる。

3　中期古墳の築造

七瀬双子塚古墳の築造時期は、善光寺平南部の集中地域から盆地一円への前方後円墳の分布拡大期にあたる。蟹沢古墳の築造から1世紀以上の中絶を経て、前方後円墳体制はこの地域に及んだ。南半部の一部地域以外の善光寺平ほぼ全域に、この時期初めて、そして一斉に起こったことである。この時期に前方後円墳が波及した地域では、前方後円墳は1世代で途絶え、以後、古墳は墳形の変化・規模の急激な縮小化を示す。この現象には、畿内政権による全国的なレベルでの政治的再編過程を見るべきであろうことは、これまでも多く指摘されてきた。中野市域では、この段階の古墳のほとんどは扇状地西側の丘陵地に分布している。丘陵上では七瀬古墳群［岩崎・滝沢・檀原1989］をはじめ、調査が行われた古墳のほとんどが5世紀半ば前後であるのに対して、扇状地東縁ではこの段階以前の古墳として姥懐古墳［田川・松沢1982］をあげうるのみである。これよりやや遅れ5世紀末から6世紀初頭になると、東縁の山頂に金鎧山古墳・紫岩古墳が築かれる。同じ時期丘陵上には目立った古墳は今のところ確認されていない。これ以降この地域には古墳が存在せず、後期古墳群としては、扇状地周囲の集団とは別な造営基盤をもつと思われる、地理的にやや離れた夜間瀬古墳群をあげうるのみである。中期古墳の様相は、前期古墳同様、古墳築造の契機が安定したものでなかったことを示している。しかし、それはその契機を得るという点での不安定であって、そのまま地域集団自体の不安定を示すものとはいえないだろう。

ところで、善光寺平の南部においては、複数の集団間による首長権の継承が跡付けられている［岩崎1988］。かつて、中野市域の前方後円墳や前方後方墳についても、同様の可能性が指摘されたことがある［土屋1982］。しかし、前方後円墳・前方後方墳に限れば、首長墓の継承という事態はこの地域ではまだ明確ではない。かわって、大形の円墳が時期ごとに場所を変えて何基か造られるという状況があきらかになりつつある。これらの円墳は、立地や単独墳であることから、小首長墓と考えられるものが多い。同時期の分布から見れば、その首長権の範囲は一～二の集落程度に及ぶものでしかなかったと考えられる。このなかで、七瀬古墳群に見られる時期差がそれほどない古墳の群集は、この地域で他に見られない。七瀬古墳群の中核は前方後円墳七瀬双子塚である。七瀬古墳群の円墳群は、一族から前方後円墳被葬者を輩出したことが、古墳築造契機という点で近隣他集団に比べて、この集団を相対的に優位に置いたことを示すものであろう。また、この集団を含む西部丘陵地周辺の集団が東部の集団に対して同様であったことが扇状地東西の分布の偏在に示されている。この事態は５世紀中葉から後半の短期間で終息し、一～二世代後には、その優位は東部に移る。それも直後には古墳築造の契機が失われて、古墳が見られなくなるのである。

４　地域集団のすがた

善光寺平南部においては、一～二の集落を基礎的な集団とし、それが複数集まって「ルーズな連合体」を構成して首長権の継承が行われる。その結果、数世代の前方後円墳がそれぞれの基礎的集団を直接の母体として造営されながらも、「連合体」全体としては首長墓の累世的築造が行われたと考えられている。これに相似た現象は、さきに見たように中野扇状地周辺においても見ることができる。つまり、この扇状地周囲の全体を包括する「連合体」が存在し、それは大きくは扇状地の東部と西部の集団に二分される。また、それぞれは一集落程度を基礎とする複数の集団から構成される。蟹沢古墳の築造に示されるこの「連合体」の形成には、扇状地末端の同一水系における低湿地開発の開始という事態が、大きく影響を及ぼしたことと思われる。それは、蟹沢古墳の様相やこの時期の集落の外来系土器に見られるように、何らかのかたちで人の移動を伴うような対外的関係の深まりの中で起こった。それはこの地域の古墳時代の幕開けでもある。この動きは、土器群の消長によく示されるように、弥生時代後期からの畿内・東海・東国といった大きな関係のなかで理解されるべきものである。つまり、在地集団の政治的・社会的発展の結果というより、全国的動向のなかで、「越への道」あるいは「越からの道」という、この地域のおかれた地政学的位置によりもたらされたものであろう。それ故に、その後、東国における政治的動向の焦点が他地域に移るとともに、以後約１世紀の古墳の空白期を迎えざるを得なかったのではなかろうか。また、その空白期も「連合体」が維持されていたであろうことは、蟹沢古墳とほぼ同様の空間的エリアを基盤として、七瀬双子塚が地域全体の首長墓として築かれたと考えられることからもうかがえる。

善光寺平南部においては、七瀬双子塚より以前から以後まで、前方後円墳の造営が継続して行われていた。それと比べて、前方後円墳築造の契機が５世紀中葉時点までなかったことに示されるように、この地域集団の基盤が相対的に弱いもの、言い換えればより「ルーズな」ものであったであったことは考えなければならない。これが、対外的には前方後円墳の築造を遅らせた一因である。また、前方後円墳を築造したことが集団の政治的発展を促したであろうことを考えると、この集団にはそのような変化を促す要因が、５世紀半ばまで存在しなかったことになる。岩崎は、この地域の割竹形木棺の卓越に畿内「棺制」［都出1986］の直接的反映を見、中央王権とのかかわりの深さを見た［岩崎・滝沢・壇原1989］。遅れて加わったからこそ在地での政治的諸関係の未発達が存在し、それゆえ、個々の円墳に示されるような小首長が畿内に直接かかわりをもち得たとも考えられよう。このような集団のすがたは、前方後円墳が１代で終わり、１集落単位ほどの空間的間隔をもって円墳が築造されることにも示されている。つまり、地域全体を統合する方向より

も、集落単位で古墳築造契機を得るような方向への動きが見られるのである。この地域の中期古墳が、集団の内的発展の結果ではなく、対外的契機によりつよく規定されて造営されたことは、一貫した首長系列がたどれないことにもうかがえる。そして、対外状況の変化とともに、政治的に十分発展し得なかったこの地域集団は、対外的にも対内的にも古墳造営の必然性を失い、それ故に後期群集墳の形成にも発展できなかったのではないか。

善光寺平南部における前方後円墳の世代ごとの移動に類することは、扇状地の西部から東部への古墳立地の移動というかたちで見られた。今のところ、東部には七瀬双子塚の首長権を受け継いだ地域全体の首長墓を確認できないが、その候補として高遠山古墳［田川・松沢1982］をあげることができる。この古墳は前方後方墳の可能性もあり、前方後円墳であるとしても古い形態をとるように見える。しかし、この地域の古墳様相の中では、５世紀後半段階の可能性を考えるのも一案ではないかと思われる。そうだとすれば、東西２集団の存在はより蓋然性をもつだろう。

以上のような状況は、善光寺平北部の前方後円墳に示されるそれぞれの地域のすべてにおいて認められる現象である。中野・飯山市域と他地域の状況がもっとも異なるのは、前方後方墳の前史を持つかどうかという点である。５・６世紀、この地域はその前史をもちながらも、それをもたない地域とほぼ同じ古墳築造の状況を示す。前方後方墳の築造契機と前方後円墳のそれとに、質的ちがいが存在したことの傍証ともなろう。そのちがいとは、これまで述べてきたことからもうかがえるように、古代国家形成過程の、それぞれの時点において在地集団がもたねばならなかった対外関係のレベルの違いである［都出1989］。

5　周辺の古式須恵器

ところで、栗林遺跡には、この地域の主要な古墳分布が扇状地東部へ移ろうとする時期の集落が存在した。その竪穴住居址からはTK208前後に相当する須恵器が見いだされている。この住居はやや規模が大きくかまどを造り付けているが、集落内で特別な位置を占めるようには見えない。須恵器が住居の時期を示すものとすれば、県内でも古い時期のかまどの一例である。善光寺平では、陶質土器やTK73・TK216・TK208段階の須恵器が盆地一円に分布することが知られている［木下1992］。これらⅠ期の須恵器の大半が古墳出土品である。集落からの出土は長野市牟礼バイパスB地点［横山1986］・長野市本村東沖遺跡など浅川扇状地遺跡群［飯島1993］、更埴市・長野市南部［木下1992］などでいくつか知られる。栗林遺跡例は集落出土の例を加えた。

中野市域はこの時期の須恵器の出土例が比較的多く、金鎧山古墳・紫岩古墳・七瀬５号墳の出土品、古墳以外では新井大ロフ遺跡［金井1982］で祭祀遺構にともなうと考えられるものがある。他の古墳として、長野市上池ノ平２・３号墳［矢口・横山・青木1988］・更埴市森２号墳［岩崎・他1992］などがあげられる。すべて中小の円墳であり、埋葬施設内への副葬ではなく墳丘または周溝内への供献状態で出土している点も共通している。県内他地域においてもほぼ同様である［西山1988］。この須恵器の存在は、前方後円墳が盆地一円に拡大した直後に、さきの円墳がさらに小集団を母体として築造された契機と不可分の現象を示すものである。善光寺平周辺では、TK47型式とされる、長野市松ノ山窯跡［笹沢・原田1974］が最古の須恵器窯である。それにさかのぼるこの時期の須恵器は、今のところ搬入品と考えねばならない。これら当時の文物として最新の須恵器は、中・小円墳の被葬者が、畿内政権とのかかわりのなかで得た古墳築造契機の一環としてもたらされたものであったと考えられる。なかでも、栗林遺跡・七瀬双子塚・紫岩・金鎧山古墳と浅川扇状地遺跡群・地附山古墳・上池ノ平２・３号墳という、集落・前方後円墳・円墳の相似した関係には、両地域の政治状況にも相通ずる点があったのではないかと思わせる。仮に将来、松ノ山窯跡にさかのぼる窯があきらかにされることがあるとしても、これらの須恵器のもつ意義はさほど変わらないであろう。

このように見た場合、栗林遺跡の須恵器は、先述した地域集団の発展段階の理解によく相応する資料であるといえないであろうか。憶測になるが、中期の円墳被葬者が、かまどや須恵器という最新の文物を受け入れてはいても、ほかの竪穴住居とそれほど変わるところのない住居を住まいとしていたとしよう。そこには対外的に共同体を代表し得ても、共同体のうちにおいてはいまだ政治的に卓越した存在に上昇し得ない小首長のすがたを見ることができるかもしれない。これら小首長にまで古墳築造の契機を及ぼした後、善光寺平南部においても、ほぼこの段階で前方後円墳の築造は終了し、すでに群集墳の時代が始まろうとしていた［土屋1992］。善光寺平北部では前方後円墳の終了は南部よりやや早く、そして、同じ集団が中期から継続して後期古墳を造ることはなかった。このことに、どのような意義を見るかについては、もうしばらくの時間と資料の積み重ねが必要であろう。

引用文献

青木　一男　1993　「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』69・70長野県考古学会
赤塚　次郎　1990　『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
　　1992　「前方後方墳」『季刊考古学40』雄山閣
甘粕　　健　1986　「古代文化の形成」『新潟県史通史編１』新潟県
〃　・他　1993　『越後山谷古墳』巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室
飯島　哲也　1993　「本村東沖遺跡出土の古式須恵器について」『本村東沖遺跡』長野市教育委員会
岩崎　卓也　1982　「川柳将軍塚古墳・姫塚古墳」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
　　1988　「古墳と地域社会」『日本考古学を学ぶ（３）』有斐閣
　　1989　「古代社会の基礎」『長野県史通史編一』長野県史刊行会
〃　・他　1992　『史跡森将軍塚古墳』更埴市教育委員会
岩崎卓也・滝沢誠・檀原長則・他1989　『七瀬古墳群・田麦中畝古墳群』中野市教育委員会
宇賀神誠司・他　1987　「上木戸遺跡」『中央道長野線発掘調査報告２』長野県埋蔵文化財センター
臼居　直之　1993　「弥生時代終末から古墳時代前期の様相」『長野県考古学会誌』69・70長野県考古学会
小野勝年・横山浩一　1953　『下高井』長野県教育委員会
金井　汲次　1982　「新井大ロフ遺跡」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
〃　・他　1967　『安源寺遺跡』長野県考古学会
木下　　亘　1992　「長野県下出土の古式須恵器概観」『史跡森将軍塚古墳』更埴市教育委員会
斉藤忠・他　1978　『弘法山古墳』松本市教育委員会
笹沢浩・原田勝美　1974　「長野県下出土の須恵器」『信濃』26-11
田川幸生・松沢芳弘　1982　「蟹沢古墳・高遠山古墳・姥懐古墳」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
檀原　長則　1982　「紫岩古墳」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
土屋　　積　1982a　「七瀬双子塚古墳」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
　　1982b　「金鎧山古墳」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
　　1992　「森将軍塚古墳の墓域構成について」『史跡森将軍塚古墳』更埴市教育委員会
　　1993　「長野県内の竪穴式石室と木棺」『長野県考古学会誌』69・70長野県考古学会
都出比呂志　1986　『竪穴式石室構造の地域性の研究』大阪大学文学部
　　1989　『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
　　1992　「墳丘の型式」『古墳時代の研究７』雄山閣
直井　雅尚　1993　『弘法山古墳出土遺物の再整理』松本市教育委員会
西山　克己　1988　「信濃国で須恵器が用いられ始めた頃」『信濃』40-4　信濃史学会
前島　　卓　1993　「北陸系土器の動向」『長野県考古学会誌』69・70長野県考古学会
松沢　芳弘　1982　「勘介山古墳」『長野県史考古資料編』長野県史刊行会
矢口忠良・横山かよ子・青木和明　1988　『地附山古墳群』長野市教育委員会
横山かよ子　1986　「古墳時代中期須恵器について」『浅川扇状地遺跡群』長野市教育委員会
綿田　弘実　1991　「西条・岩船遺跡」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器、第３分冊』